ご挨拶

学長　大西　晴樹

明治学院大学はキリスト教による人格教育を建学の精神とし、その教育理念を一言で表現するならば'Do for Others'「他者への貢献」と言い表しています。これは、新約聖書の言葉であると同時に、明治学院の創始者 J.C. ヘボン博士の生涯を貫く理想を表現したものです。

ヘボン博士は、幕末維新の日本へプロテスタント・キリスト教を伝えるべく 150 年前に来日したアメリカ人宣教医師です。医師としてニューヨークで成功を収めながらも、開国したばかりの横浜に上陸しました。当時の日本は尊皇攘夷の嵐が吹き荒れ、まだキリシタン禁令の高札が掲げられていた時代です。身辺にはスパイが潜入し、クララ夫人は何者かに殴打され心身ともに傷を負ったことさえありました。それでも博士は聖書の言葉に堅く立って、無償で弱者への施療活動をなし、患者との出会いを通して日本語を学び、夫人とともに青少年に英語を教えるべく明治学院の前身であるヘボン塾を開設し、日本最初の本格的和英・英和辞典である『和英語林集成』を編集・出版、ついに聖書を日本語へ翻訳したのでした。

さて、明治学院大学の教育活動で、'Do for Others' という教育理念を直接体現するのがボランティア活動だといえましょう。1990 年代前半の明治学院大学においてボランティアは、いく人かの教員によるリレー方式の総合講座として、現場ではなく、教室で教えられていました。しかし、1995 年の阪神淡路大震災を契機として、ボランティア活動の重要さが認識され、ボランティア活動を正課であれ、課外であれ、明治学院大学において推進することに学内のコンセンサスが与えられました。じっさい明治学院大学は、震災後、明治学院ゆかりの神戸の賀川記念館を拠点として延べ数百名の学生を現地に派遣し、おもに子どもや老人のケアに献身的に当たり、神戸の復興に間接的ながら貢献し、参加した学生に多くの感動を与えました。その後 1998 年に横浜キャンパスに全国の大学に先駆けてボランティアセンターを開設し、2001 年には、白金キャンパスにも開設しました。また全国の大学におけるボランティア活動を支援するソニー・マーケティング学生ボランティアファンドの事務局として中心的な役割を果たし、

2003年には優れた教育活動に対して競争資金が与えられる文部科学省の第一回目の特色GP（good practice）に選ばれました。

現在、ボランティアセンターは、白金と横浜のボランティアセンターを拠点にいくつかのプロジェクトを立ち上げ、コーディネーター、学生スタッフを中心に日常的な活動を推進しています。また、ボランティア情報を紹介するためにメールマガジン「MG☆ボラマガ」を配信しており、その登録者は2011年1月現在321名（学生272名、教職員が49名）を数えます。

明学生の自発的なボランティア活動をさらに支援するため、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」を実施しています。大学グッズの売り上げの一割が大学からボランティアセンターに委託され、この賞の原資となっています。応募団体によるプレゼンテーションを中心とした審査会には、私も審査委員として参加しますが、熱のこもった発表を聞くことができます。

ボランティアセンターでは、海外でのボランティア活動にも力を入れています。毎年カリフォルニアに派遣するアメリカNPOボランティア 体験学習プログラムはテーマを定め、地元のNPO活動の一翼を担い、日本のわれわれが置かれている問題との共通性を考えようとしています。

学長としてみなさんにお伝えしたいのは、'Do for Others'という教育理念は「言うは易し、行うは難し」です。ボランティア活動は、相手に感謝されてはじめて意味をもつのであり、そうでなければ、一人善がりのお節介か、たんなる自己満足にすぎません。ボランティア活動を通じて、自分たちの'Do for Others'の気持ちが、どれほど地域や近隣の人々に感謝されるのか考えてみるのは、他者を理解するうえで大切なことであり、もし感謝されていなければ、どうしたら感謝されるのか、試行錯誤することは、人間の成長にとって大切なことです。

明治学院大学の教育理念を体現するボランティア活動に、ボランティアセンターを通じて参加することによって、学生の皆さんがお金では買えない大切なものを手に入れることを切に願っています。

センター長挨拶

ボランティアセンター長　原田勝広

内容が盛りだくさんの2010年度報告書をお届けできることを誇りに思います。私がボランティアセンター長になって1年たちましたが、教育の視点から学生と社会貢献活動のかかわりの重要性が今ほど議論されている時代はないのではないかと思います。

例えば、国際協力機構（ＪＩＣＡ）は大学生らにボランティアなど学校以外の活動に従事する期間を与える「日本版ギャップイヤー」制度の提言をまとめようとしています。大学に合格したあと、実際に入学する前に1年間、学生に福祉の現場でのボランティアや、途上国支援など世界を知るための海外ボランティアを奨励しようという試みです。教室では得られない知識を社会での体験を通して学ぶというのが目的といえます。

また、法政大学元総長の清成忠男氏は、人口減少社会の中で大学の在り方を問い直すべきだとの考えから、社会的課題の解決に向け「大学が持つ知的能力を生かし、ソーシャル・イノベーションを推進する」ことを提案しています。この構想で学生の果たす役割が大きいことは間違いありません。

しかし、こうした社会の要請に対し、大学および学生の意識、活動が十分に応えられているかというと、必ずしもそうとは言い難いと思われます。そこにはいくつかの課題があります。明治学院大学は、無償で弱者への施療活動を行ったヘボン博士の「Do for Others」を教育理念とし、1995年の阪神・淡路大震災で現地に多くの学生が駆け付けたのを機に、他大学に先駆けて学内にボランティアセンターを設置しました。これまでの活動は多岐にわたり、充実したものといえます。詳しい説明は他のページに譲りますが、特に、白金、戸塚という大学周辺の地域コミュニティとの関係を構築するなかでの、ボランティア活動は、周辺住民の方々からも高く評価されているものです。ボランティアセンターでは、先輩の教職員、多くの学生が営々と築き上げてきた歴史と伝統を守り、これを引き継ぎながら、さらなる発展を目指したいと考えているところです。

その中で、感じる問題点のひとつが、新しく入ってくる学生の一部に見られるボランティアに対するイメージのゆがみです。一言でいえば､ボランティアを非常に狭い枠の中でとらえてしまっています。ボランティアのもとになっている基本はボランティア精神です。人のために、社会のために何かしたいと思う心です。身の回りでいえば、電車の中でお年寄りに席を譲ること、大きくいえば、途上国の貧困を解決するために国連で働くこと、これらはすべてボランティア精神の表れでしょう。

しかし、ボランティアといわれて、新入生が思い浮かべるのは、公園の清掃であり、高齢者施設への慰問なのです。高校の総合学習などでボランティア体験を取り入れるところが増えてきたため、「いやいやながら」ボランティアをした経験がトラウマになっているケースが見られます。こういう学生に話を

聞くと「ボランティアは敷居が高すぎる」「ボランティアは好きじゃない」という答えが返ってきます。強制的にやるのは本当のボランティアとはいえません。こうした雰囲気を感じるせいか、入学後、積極的にボランティアにかかわっている学生も、ボランティアという言葉をあまり使いたがりません。

私はこれは大変不幸な事態だと感じます。誰でも、困っている人を見たら、助けたい、役に立ちたいという気持ちは持っているものです。こういう気持ちが人と人の関係をよりよいものにし、コミュニティを成り立たせているといっても過言ではないでしょう。日本の社会には、さらに、地球規模でも、そういうボランティア精神がなくては解決できない問題が山積しています。そして、今、そこには、多くの人たち、ボランティア団体、非営利組織（NPO)、非政府組織（ＮＧＯ)、政府、国連、さらには企業が協力の輪に加わって、いろんな社会問題を解決すべく努力しているのです。

そこで、冒頭述べました社会の「新しい風」に、どう対応したらよいか、ボランティアセンターでは考えました。明治学院大学ボランティアセンターのこれまでの実績をベースに学生にボランティアをもっと広い枠の中でとらえてもらおう。そういう中で、教育プログラムとして何か生み出せないか。そして、私たちは気付いたのです。ボランティア精神の発露は多様であるはずだと。この１年間で企画を何度も練り直し、ようやく新しいプロジェクトを立ち上げることにしました。

新入生を対象にした「1 Day for Others―まちへ出よう」がそれです。2011 年度スタートです。５月 14 日に、新１年生が一斉に、戸塚の街、神奈川県下、さらには東京へと“同時多発”的に繰り出すのです。「ボランティア・コース」「社会起業家コース」「企業の社会貢献・ＣＳＲ体験コース」の３つのコースがあり、30 プログラムを用意しています。連れて行くのは１年次上の新２年生のリーダー学生です。希望によって、ボランティアを体験するもよし、ビジネス手法で社会貢献に挑戦している最近注目の社会起業家のところで１日インターンを経験するのもよし、誰もが知っている大企業で、利益を追い求めるだけではなく、社会に貢献しようとしている業務の研修をするもよし、というわけです。

たった１日の活動ですが、これをきっかけにして、何のために、何を勉強するのか。そして、自分はどういう学生生活を送りたいのか、どんな人生を送りたいのか。改めて、じっくり考えてほしいのです。そのことを通して、これからの学業、サークル活動、ボランティア活動につなげてもらいたいと思います。そのためにボランティアセンターはみなさんに助力を惜しみません。

新入生は毎年入ってきます。このプロジェクトが４年続けば、学生の多くが、これを体験済みということになります。その時、大学がどう変わるか、社会と大学との関係がどう変化しているか楽しみです。

何か新たな価値が生まれるとしたら、それこそが、本来のボランティアも持つ意味であり、大学におけるボランティアセンターの役割だと、私たちは考えています。そして、そのために、全力を尽くしたいと思います。